

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 原宏之

博士学位請求論文『言語態分析 – コミュニケーション的思考の転換』（慶應義塾大学出版会 2007年4月30日刊行、436頁）は、「言語態分析」を行うために、理論史から説き起こし、関連領域の諸理論を探索し、分析対象、方法および事例を提示し、適用領域と分析の射程を画定し、独自の理論的総合を試みた著作である。

全般的な問題設定を述べた序章「コミュニケーションの問いとしての言語態分析」において、著者は「言語態分析」研究の課題と展望を描き出している。

著者のいう「言語態分析」とは、東京大学総合文化研究科「言語態分析」大講座に謳われた言語および記号の社会的・文化的実現の研究のことであり、1. ディスクール、2. コミュニケーション、3. 技術との関係、4. かたち、5. 創発性、という五つを理論的な軸として展開されるものとされる (pp.27-28)。社会的機能としてことばの問題を考えることを、著者は「(音声・音韻・文法・認知機能の研究である) 言語学」と区別して「言語理論」と呼んでいる。その言語理論には三つの潮流があるとされ、その一つがエスノメソドロジーから出発した「会話分析」であり、その二が、イギリスでは **Critical Discourse Analysis**、フランスでは **Analyse du Discours** と呼ばれる「言説分析」であり、その三が、視聴覚メディアや記号論などの周辺分野を取り込んだ「マルチモーダル言説の分析」である。著者のいう「言語態分析」は、そのうち二つ目の「言説分析」に依拠しつつ第三のマルチモーダル分析の視点をも取り入れた企てであるとされる。フーコーの『知の考古学』を手がかりに、「言説編成」、「ディスクール」、「コミュニケーション」の諸概念を再検討し、「記号の次元」と「支持体の次元」を歴史的視野に収め、コミュニケーション社会の具体的現象に照準することが、言語態分析の課題であるとされる。

理論的な見取り図を提起した序に続いて、本論の前半においては、コミュニケーション論（第1章「コミュニケーション的思考の転換」）、意味論（第2章「言語学の偉大なる異端をめぐって：意味論とダイクシスの問い」）、発話行為

論（第3章「言語態分析へ：言説編成と発話行為の間」、リズム論（第4章「かたちとしてのリズムの導入」、マルチモダリティ論および会話分析（第5章「映像・文字・会話、マルチモダリティとしてのテレビ番組」）の理論諸領域が探求され、おもにミシェル・フーコーの「ディスクール」理論を発展させつつ著者自身の言語態分析の理論の輪郭が練り上げられていく。

「コミュニケーション」および「情報」の概念およびその研究史を捉え返すことから著者は、「情報とコミュニケーション科学」の来歴および言語態分析の位置取りを確認する（第1章「コミュニケーション的思考の転換」）。「コミュニケーション」および「情報」の語の使用は、20世紀以後極めて多義的であり、情報理論やサイバネティクス、世論研究、脱工業社会の文脈における政策論など、極めて多様な分野において問題化され、多くの研究モデルを生んできた。著者は、そのなかでもフランスの「Sciences de l'Information et de la Communication」の研究動向に注目し、「コミュニケーション論の再物質化」をキーワードに、その学際研究の行方を見定めようと試みている。

続く第2章「言語学の偉大なる異端をめぐって：意味論とダイクシスの問い」においては、ポール・リクール(Paul Ricoeur)の「ディスクールの理論」、ジャン＝フランソワ・リオタール(Jean-François Lyotard)の「ディスクールのなかの欲望」の「形象(フィギュール)」概念を検討したのち、エリゼオ・ヴェロン(Eliséo Véron)の「ディスクールの物質性」が焦点を当てられる。

第3章「言語態分析へ — 言説編成と発話行為の間」において、著者の「言語態分析」の中心的な理論枠組みを提供しているフーコーの「言説」および「言説編成」の概念に検討が加えられる。『言葉と物』(*Les mots et les choses*, 1966)や『知の考古学』(*L'archéologie du discours*, 1969)においてフーコーが1960年代に展開した「言説(ディスクール)」の理論は、以後、フランスおよびフランス語圏を中心に、社会学・コミュニケーション研究・歴史学などの学際領域で、「Analyse du Discours(略称 AD)」と呼ばれる研究潮流を生み出した。著者はこの動向に着目しつつも、「コーパス」の「自動分析」を目ざしたADが「見なかったもの」は「ディスクールの潜勢力」であるとする(p.129)。ところが、フーコーの「アーカイヴ」概念に込められていたのは「語られることもできたのに実際には語られなかった発話内容を含む」ものであり、フーコーの「言説編成」は、「語られなかった発話内容の潜勢力をも含めた発話内容間の関係性から成っている」(pp.129-130)とされる。そのうえで、ミシェル・ペシュー(Michel

Pêcheux)らによる政治語彙分析とフーコーのディスクール分析とを比較している。さらに、デュクロ (Oswald Ducrot) やケルブラト＝オレッキオーニ (Catherine Kerbrat-Orecchioni)による「発話行為」分析を加えて検討することにより、「発話行為」の分析と「言説編成」の分析を組み合わせ、ミクロな分析単位からマクロな視点へと至る「言語態」分析の理論の構築への道筋を説いている。

第4章「かたちとしての<リズム>の導入」では、アンリ・メショニック (Henri Meschonnic)らによる「リズム」概念の問い直しを手がかりに、発話のリズムから「ディスクールのリズム」へと至る展開にこの章での考察はあてられている。「最小単位の発話どのように集まり、どのように離散するか」を最も「ミニマルな分析対象」に、「発話 — 発話の関係性がリズムとなり、言語態のかたちを形成する」、これが「言語態分析の仮定する分析対象の姿である」(pp.157-158)とされる。

分析の実践例と、マルチモーダル分析の理論的視点を導入した第5章「映像・文字・会話、マルチモダリティとしてのテレビ番組」を介して、第6章「言語態分析の用語集」において、著者は、著作の前半部で展開してきた言語態分析の理論の主要概念の整理を行っている。「言語態」とは、「発話」、「アーカイヴ」、「ディスクール」を総合する概念であり、「コンテクスト」や「ダイクシス」を踏まえた理論を求めるものであり、「ディスクール」、「発話内容」、「テキスト」を横断し、「メディア」や「マルチモーダル」、ゴフマン (Erwin Goffman)らの「コミュニケーション相互作用」と切り結ぶ概念であることが確認されている。

以上の理論的な研究史の検討の後、第7章以下は、言語態分析の実践を具体的に示す適用編にあてられている。第7章「言語態のかたち — 社会のリズム」では、第4章で検討されたリズム論をふまえるかたちで、時事問題の論調と「社会のリズム」による言説編成の変化が重ねて考察されている。季刊誌における座談会の言説分析をとおして、論壇の言説配置における「言語態の歴史」が分析の俎上に載せられることになる。

第8章「ことばと映像の比較」においては、新聞の言語態に現れたテレビ的な「映像」言語の分析を、小泉首相の「靖国参拝」をめぐる新聞記事の分析を通して提示している。新聞記事における「描写」が、「テレビ」のエクリチュールを下敷きにしていること、ショット分析と新聞記事の記述の順序の分析をとおして明らかにされる。続く第9章「言語態分析の例 — 「小泉劇場」 —

「ウォーターフロント」においては、政治的言説の言語態分析が、「トートロジー」、「言語ゲーム」、「失言」をキーワードに展開される。また同章の後半部は、都市をめぐる言説に言語態分析の手法を応用して見せている。

最後に、メディアの分析を展開した本論後半部の総合および、最終的な理論的検討にあてられているのが、第10章「メディアオロジーからフーコーへ」である。フーコーの「ディスクール」理論との対比として最後に検討が加えられるのが、レジス・ドゥブレ (Régis Debray) らによる「メディアオロジー」である。著者は、メディアオロジーによる「媒介・伝達の世界」を、「象徴」、「技術」、「実践」、および「環境」という諸項間を結びつける概念連関で示し検討を加えたのち、メディアオロジーに欠けているのが、フーコーの「考古学」が定式化していた「ディスクールの論理」であるとしている。さらに「知の考古学」における「時間概念」を再検討し、これをメディアオロジーの「通時的分析」と突き合わせたうえで、メディアオロジーと知の考古学の接点を、「主体に対する体系の優位」、「メッセージの保存様式への視線」、「言語による政治の出来事化」に見ている。また、メディアオロジーと知の考古学との対立点を、「技術の次元」、「歴史区分の立て方」に見て取る。そして、「記憶の場」および「アーカイヴ」概念の再検討を通して、メディアオロジーの問題提起を受けたフーコーのディスクール理論の再定義をはかっている。そして、最後に、言語態分析にを具体的方法としていくための「分析の順序」と「分析の道具」をそれぞれ五項目にわたって総括することをもって、著者の言語態分析の方法とすると結論づけている。

著作にはさらに、「補遺」として「物語、経験と歴史」が付されている。「文学言語」をめぐる、「物語と公共言語」、「詩と経験」とに関する考察である。

以上に概略を述べた、原宏之氏の博士学位申請論文『言語態分析 - コミュニケーション的思考の転換』は、以下に列挙する理由から高度な学術的達成を示していると判断される。

1. 独自性：原氏の論文は、ディスクール分析のフランス学派の理論と方法をおもにフーコーの理論に依拠しつつ批判的に継承し、「言語態」の問題系に独自の理論的定式化をおこなうことによって、「言語態」研究の新しいパラダイムを理論と実践において提示するにいたった独自性をもつ。
2. 総合性：原氏の研究は、詩学、会話分析から、ディスクール分析、マルチモダリティ分析、さらにはコミュニケーション論にいたる多様な分野を横断して

独自の理論と方法を探求し、詩や物語から、政治的言説、文字メディアからテレビ番組やケータイやインターネットにいたる複合的なメディア領域を視野に収めた分析を提唱する総合性を示している。

3. 一貫性：原氏の研究は、極めて多様な研究領域を縦横に横断し、多数の理論家の知見を動員しつつ推進されており、理論の適用に関しても多様な社会的・技術的・記号的実践の層にまたがって展開されている。そのような多様な研究展開の方法をまとめ上げるのが「言語態分析」の方法的一貫性であり、「言語態」の仮説の有効性が氏の研究を通して明確に浮き彫りにされている。

他方、同論文には、幾つかの無視し得ない問題点、考察の不徹底、改善すべき叙述の問題点があることが、論文審査の過程で指摘された。まず、「言語態分析」の理論的総合を行おうという意図は十分に説得力があるものの、参照している理論が余りに多岐にわたり、考察をつらぬく理論の糸がときに見えにくくなるきらいがある。また参照されている理論相互間の両立可能性、読み替えの幅については、さらに徹底した批判的検討を要するのではないかという指摘がある。とくに、フーコーのディスクール理論やメディアロジーの通時的方法とそれ以外のとくに言語科学に依拠する共時的方法との両立可能性、エスノメソドロジーを援用することの妥当性など基本的な諸点について疑問が呈され審査会においても補足的な説明が求められた。さらに、実践的な分析の事例については、着目点の斬新さについて肯定的な評価があった反面、分析事例の歴史的な位置づけ、分析の徹底性について、より本格的な分析作業が必要であるという評価も下された。また、言語態分析とは科学的方法であるのか、それとも批判的方法であるのか、言語態分析の方法論的ステータスについての説明が不足しているとの指摘もなされた。さらにまた、既刊著作であるにもかかわらず誤植が頻見されること、書誌および一部の翻訳に不備があることも指摘された。

以上の改善すべき点、さらに研究上深めるべき課題が存在することは否定できないが、本論文が上記の独自性、総合性、一貫性の特長を有することは間違いない。原宏之氏の論文は、独自の「言語態分析」の研究成果を示す業績であると認めうる。

本審査委員会は以上の根拠にもとづき、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。